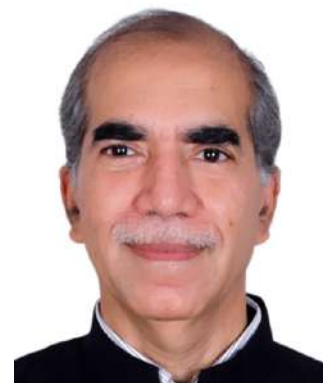


内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前 : Ravi Chopra (ラヴィ・チョプラ) (インド)
- (2) 年 齢 : 57 歳
- (3) 参加事業 : 第 6 回「世界青年の船」事業参加青年 (1993 年度)
- (4) 職 業 : 「Gandhian Forum for Ethical Corporate Governance」
アドバイザー、世界青年の船事後活動組織インド
(SWYAA-India) 会長



■ 参加のきっかけ

私が「世界青年の船」事業（以下「世界船」という。）に応募しようと思ったのは、インドの複数の既参加青年から、この事業によって飛躍的に成長することができたという話を聞いたからです。私はもともと国際交流にとっても興味があり、世界船が私の可能性の扉を拓いてくれるのではないかと期待していました。私はジャーナリストとしてキャリアを積んでいましたが、インドと日本の関係についての講演やセミナーに参加したり、様々な専門家の話を聞いたりしていました。そのことから、日本の伝統や労働文化、リーダーシップスキルを理解したいという関心が高まっていました。ジャーナリストである一方で、私は貧困層が教育トレーニングを受けることで機会平等をもたらすという活動も大変熱心に行っていました。事業参加後、社会から見えづらくなっている、主に 4 歳から 14 歳の貧困層の子どもたちに対して、さらに**教育の機会を与えたい**と思うようになりました。

日本に対する印象として、それまでは自然の美しさや、高度成長、ハイテク、高い美意識、などは知っていましたが、日本人のライフスタイルや文化について何も知りませんでした。最初に知る機会になったのはホームステイです。群馬県のホストファミリーが温かく迎え入れてくださり、自分の家族のように接してくださいました。2 日間のみでしたが、日本の伝統や文化に触れることができ、今でも最高の思い出です。また、また、実施する前の計画、準備の考え方、チームワーク、ルールを守ること、礼儀正しく親切、勤勉で他を尊重すること、集中力なども学びました。インドの文化も伝えようという気持ちがありましたが、長年交流をしていると、インドと日本の共通点もたくさん見えてきます。日本の多神教（たくさんの神様がいるという信仰）はインドにもありますし、仏教という点でも共通しています。**共通点が多くありながらお互いをあまり知らない**、というのが現状であり、だからこそ事業に参加する価値がありました。

世界船に参加した後、私の期待は叶っただけではなく、革新的な思考、マクロなビジョン、実践的な楽観主義を備えたリーダーシップを身につける機会にもなりました。**社会開発リーダーとして社会貢献する**という信念について私は認識を深め、それが後に私のキャリアへとつながっていきました。複数の国の青年たちが一堂に会することで、人類が共有する輝かしい未来への希望を新たにしました。世界船は、社会貢献活動に深く携わっており、事業を通じて得た経験やネットワークを社会開発リーダーとしてのキャリアに活かすことで、私の将来の発展に貢献しました。本事業によって、私のリーダーシップスキル、マネジメントツール、チームビルディングや対人コミュニケーション力は培われました。私は日本の印象を深めながら、自身のキャリア開発の道をさらに切り拓くことができました。この事業は**私の人生のターニングポイント**であり、開発リーダーとしての私の将来のキャリアに大変良い影響を与えました。

■ 具体的に影響のあった船上活動

世界船の期間中、私はコース・ディスカッション、クラブ活動、ナショナル・プレゼンテーション、日本や海外の青年との交流、寄港地での活動など、日々の活動を通して着実に成長することができました。すべての活動は私のキャリアにとって有益で、様々な分野に影響を与えました。さらに、同じような分野で働いている参加青年と情報を共有し、**職務レベルでも有効な良い関係を築くことができました**。私はコース・ディスカッションでは「教育」「環境」「国連」「ボランティア活動」のクラスを取り、世界で抱える課題や青年の役割について理解しました。グループ活動では背景の異なる青年との日々の交流を行うことで、異文化理解につながりました。そして自分の力をリーダーとしていかしたいと考えた時、船上で 3 つの活動を実施したいと思うようになりました。

一つは、自身のジャーナリズム経験をいかし、自主活動として「NEWS WAVE」というタイトルの新聞を発行しました。インターネットのない時代ですから、2 週間に一度、紙で発行していました。活動にあたっては、ジャーナリストもしくはジャーナリズムに関心を持つ有志の学生 20 名が集まりました。プレスボックスを設け話題を募集し、編集者代表（編集長）を務め計 5 号を発刊しました。船に、誰も使っていなかった写真現像機材があり、それを自分のキャビンに持ち込み、写真現像ができるようにしました。ここで得た経験は、私がその後長く組織の刊行物を作る際に、大変役立ちました。

二つ目は、事業参加前からインド政府の広報活動として、HIV/AIDS の啓発に関わっていました。HIV/AIDS のトピックに関しても、船上のセミナーで多くの知識を得ることができました。この知識を多くの人に広め、病気を予防する役割があると感じ、13 か国 19 人が集まり、自主活動として「HIV/AIDS Forum for World Youth」と言うイベントを実施しました。その後、自分がリーダーを務め、18 人の参加青年は各国コーディネーターを務め、HIV/AIDS に関する知識をフォーラムの形で、事業後に伝えていきました。このイニシアチブにより、HIV の問題をグローバルかつ若者の視点で、教育・啓発的アプローチにより伝える、とすることを長年実施しました。

三つ目はコース・ディスカッションで「世界平和と国連」について考えたことでした。この事業により、国と国とが協力することで「世界平和は可能だ」と肌で感じることができました。そこで私はマハトマ・ガンディの思想と活動に行きつき、非暴力と愛の形でインド社会、そして国を、平和にできる、調和をもたらせると感じました。船上にはガンディの活動の写真を持ち込み、展示しました。そうすると、多くの参加青年が関心を示し、平和的アプローチにより対立を解消することに関心を持ちました。こうやって学ぶことで、**参加青年それぞれが平和のアンバサダーとして活動**できます。私はその後も活動を続け、日本や世界の国々で講演をするようになりました。そのため、世界船は私にとって昔のものではなくスタート地点で、今もその活動を継続しているという思いがあります。

■ 実践現場を見ることができた寄港地活動

寄港地での活動は、訪問国の生活様式、文化、伝統、遺産などを理解する特別な機会となりました。個人的には、社会的・文化的組織を訪問したことで、現地の若者や開発リーダーと交流し、将来の社会開発活動の基礎となる重要な側面について、議論や交流、講座を通じて直接知ることができる素晴らしい機会でした。私個人にとって特別な寄港地活動は、青少年施設への訪問でした。スリランカでは NYSC、ケニアではナイロビ大学、インドではターター社会科学研究所（Tata Institute of Social Sciences）へ行きました。青年のリーダーシップや教育開発について学ぶことができ、**教室の学びに止まらず実践や応用**といったことを教えてもらいました。このことで、私は社会福祉（ソーシャルワーク）の分野で自分の力を発揮したいという思いが強固なものとなりました。**現地の方々から直接学ぶ機会**や、同時に国の文化、慣習、文化遺産に触れるという貴重な機会を得て、寄港地活動もリーダーシップの発揮に役立ちました。世界船は、世界的な問題や他の参加国の文化を理解するためのきっかけを作ってくれました。私の友人の輪が広がっただけでなく、**永く続く友情を築く**ことができました。同時に、この事業は相互理解を促進し、私は日本の人々、文化、伝統、ライフスタ

イル、仕事に対する考え方や組織のスキルについて深い知識を得ることができました。世界船は、「世界平和構築」「調和」「兄弟愛」「リーダーシップの育成」「異文化理解の共有」を実現するステップストーンであり、日本と海外の参加青年との継続的かつ人と人との交流により、私は豊かな経験をすることができました。全体として私の日本に対する印象は大きく変わり、**インド人に日本の文化、伝統、ライフスタイルを広めたい**と思うようになりました。

■ なぜ、船を使った国際交流か？

船を使った国際交流プログラムは、リーダーシップの育成、異文化間のグローバルな問題の理解、そして、たとえ住んでいる国や価値観が違って、平和、調和、友情、寛容、思いやり、そして地球を良くしようという気持ちは同じだということを理解し、深い絆を築くための**体験型学習を行う「海の上の学び舎」**としてユニークなものです。グローバル化が進む今日、国境を越えたネットワークを構築し、相互理解を深めるために、**異文化間の協力は急務**であり、世界船はその一翼を担っています。この事業は、若い参加青年が船上で**共同生活をしながら経験を共有し、リーダーシップを身につけるというユニークな機会**を提供するものです。また、参加者は異なる国を訪問しながら意見を交換し、国籍を超えた相互の友情と親善を培います。友情を育む船上では、大海原の波のエネルギーが青年たちの心に流れているようにも感じられます。このような経験は、若者たちに、世界のさまざまな地域の人々と能力を養うように促し、相互理解を深め、国際協力の精神を培い、異なる文化や考え方を尊重することにつながります。世界船では、リーダーを目指す若者たちが一緒に生涯の旅をし、貴重な時間を共に過ごし、お互いを頼ったり支えたりしながら、勇気付け慰め合い、航海中はお互いに力を与え合うのです。**人間関係は何にも勝るものであり、誰もが異文化を尊重し理解**することで世界をより良い場所にすることができると理解し、大切にすることができるのです。これが世界船を他のプログラムとは全く異なるものにしていきます。

■ 事後に影響を与えた世界船の価値

この事業で得たネットワークが、**自分の職業やキャリアの繋がりに役立った**ということも、特徴です。第 6 回に参加したのはエジプト、ケニア、スウェーデン、スリランカ、ギリシャなどの青年たちでしたが、私が今思いつくネットワークとしてはインドで勉強する日本や他国からの学生とつながることで、私はすでに日本からの 156 名の留学生、他国の留学生にも応対してきました。その全てが、既参加青年からの紹介です。例えば「ホームステイ・プラスワン (Homestay +1)」プログラムでは、自国でレクチャーを受けた後に海外で教育プログラムやホームステイを体験するというもので、これまで希望者 38 名に対応しました。また、国内の自然災害においても、国際的なネットワークから支援をいただくことができました。チェンナイやコチでの洪水が起きた際、教育用品、衛生用品、衣類などを遠隔地の子どもたちに調達するなど、インドの既参加青年のサポートを得て実現しました。2016 年にはインドで第 10 回「世界青年の船」事後活動組織国際大会を開催することができ、24 か国 104 名が集まりました。国際大会では友情を再確認するだけでなく、この場で話し合った企画は、**各国の事後活動組織同士で活動に発展**させることができます。2009 年から 2019 年まで、自分が乗船時から続けてきたマハトマ・ガンディの平和活動の紹介を、日本および他の参加国において、ネットワークを活用して実施しました。ガンディの教えや世界平和の意義は、今日の青年にも有用だと考えています。



インド青年スポーツ省大臣および長官（セクレタリー）が出席した SWYAA 国際大会（2016）

■ 事後活動組織の設立

私は、インドの事後活動組織「SWYAA-India」の設立に向けて率先して活動しました。事業参加後、社会活動をよりやすくするためにも、団体の必要性は見ていました。団体の目的として、社会への貢献と、世界船への協力がありました。私は 1994 年の参加でしたので、同じ参加回のメンバーと、ゆるやかなつながりにおいて社会貢献活動をする、という状態でした。世界船で船がインドに寄港する時には集まるといこともカジュアルに続いていました。たまたま 2006 年に既参加青年が集まっていた時、「2014 年に 20 周年を迎えるね」という話の流れで、**組織化をしたら自分たちの活動がしやすくなる**ということを私が伝えたところ、賛同の声を得たのです。私は既参加青年に声かけをする世話人で、ミーティングを行いました。正式には 2007 年に発足し、第 2 回の既参加青年が最初の会長を務めました。第 2 回からは会長以外に 4 名、第 4 回から 3 名、第 6 回から 8 名がメンバーとなりました。私は事務局長の立場でした。活動するには政府に登録する必要があり、私たちはデリーの一団体として誕生しました。その後、全ての既参加青年に声をかけ、社会活動への参加を促しました。法人化したことで活動の幅が広がり、よかったですと思っています。私は様々な社会貢献活動を行い、世界船の目的に沿い、より社会的責任を果たし、社会の向上に向けて活動するよう青年たちを動機付けました。長年にわたり、私はインド政府青年スポーツ省、IYEO、駐インド日本国大使館に対し、世界船のインド青年選考、事前研修、インドでの寄港地活動を円滑に進めるための支援を提供する機会に恵まれました。世界船の経験から、私は気高く、自発的に、貢献的に活動し、インクルーシブかつアクセス容易な開発を目指して働くという精神に集中し、人としての大義を擁護できるようになりました。

■ インドと日本の友好的関係の発展

私の取組によって、インドと日本間で数百の学習の機会やコラボレーション、ネットワーキングが行われました。世界船で得たすべてのスキルを生かし、インドと日本間の戦略的関係を育み、強化するために、組織を設立し、インドと日本間の文化振興や人と人との触れ合いに貢献する活動を自主的に行いました。私は、両国の友好関係をさらに前進させることができました。私は、ユニークなアイデアを具体的な成果に結びつけ、社会貢献活動を推進し、さまざまな分野での協力的な交流を通じて若者に力を与えることで、それに基づく取り組みを奨励してきました。私は 20 年以上にわたり、インド・日本間の文化交流を促進し、日本への理解を深めるためにさまざまな活動を構想から練り、計画、そして実施して

きました。例えば、日本の 8 つの大学から学生 156 名のインド海外研修を支援、「コンニチハ・ジャパン・フェスティバル」(後述)、「日本食フェスティバル」「日印音楽の夕べ」「茶道」「合唱」「日印友好協会」「日本語教室」「東日本大震災追悼会」「駐インド日本大使館主催の記念行事に公式参加」などの様々な取組を行い、多様な文化分野や人と人との触れ合いの活動を育成・強化することができたのです。日本の大学、政府機関、NPO、駐日インド大使館が主催する 47 の講演会を日本で開催し、世界の平和、調和、青少年のリーダーシップの推進に努めました。これは、日印関係を促進するための活動として評価されました。



「コンニチハ・ジャパン・フェスティバル」(2017)

文化交流としては 2017 年には、**デリーで最大規模となった日本紹介イベント**「コンニチハ・ジャパン・フェスティバル」を開催しました。日本文化や工芸、風習を紹介するもので、2 万人を集客しました。駐インド日本大使館、JICA、ジャパン・ファンデーション、駐インド日本商工会議所などの協力を得ました。2018 年、静岡県の食文化を紹介するイベント「日本食フェスティバル」も主催しました。食の紹介を、都道府県ベースで展開できると思ったからです。既参加青年の力を借りて、日本から 4 人のシェフを招くことができました。新型コロナウイルスの影響で次回以降の開催は決まっていますが、新しい都道府県をお招きする活動につなげていきたいです。

私は、絶え間ない説得により、様々なグループや組織を設立し、文化交流や人と人との触れ合いに貢献する活動を自主的に行い、インドと日本の友好関係や世界船の目的を促進し、両国の戦略的關係を育み強化してきました。活動を始めた頃、活動の教育的要素を強められるよう、駐インド日本大使館や JICA、ジャパン・ファンデーション、日本企業などを訪問し、活動を支援いただくようになりました。4 歳から 14 歳の貧困層の子どもたちに教育の機会を提供するときにも、「SWYAA オープンスクール」では日本からのボランティアも多く来てくれ、日本語や日本文化、日本の歌を教えることで、子どもたちが幼い頃から日本文化に触れ合っているように意識しています。



プラティバ・パティル大統領が参列した、SWYAA オープンスクールの授与式（2008）

■ 事後活動組織同士の連携

私はこれまで、世界中の事後活動組織との連携に携わってきました。私は、世界船から得た学びは、人類に貢献するリーダーシップ能力を高めるために活用されるべきと強く信じているのです。私にとって、SWYAA-Indiaは、人類に貢献する能力を持ったリーダーを育成すること、SWYAA International に加盟する参加国でのネットワーク作りの機会を提供すること、そしてインドでの事後活動に力を与える団体であることが理想です。私はこれまで、SWYAA-India の事後活動として、インドにおける世界船の寄港地支援とコーディネート、第 10 回「世界青年の船」事後活動組織国際大会のインドでの開催、恵まれない子どもたちのための「SWYAA オープンスクール」の設立、日本の 9 つの大学との青年交流事業、写真、折り紙、絵画展、災害支援事業、新型コロナウイルス感染症（COVID）への支援事業、SWYAA との連携事業、SWYAA と SSEAYP-国際事業間での連携、日本の 3 大学との児童教育プロジェクトなどを成功させることができました。

また、私たち SWYAA-India は、東ア船の事後活動組織とも協力している点がユニークだと思います。2016 年に私たちがシンガポール、インドネシア、カンボジアを訪問した際、レクチャーをする機会を設けてくれました。2021 年 11 月、オンラインでの活動をした際も、カンボジアから既参加青年が参加するなどしてくれています。ですから、私は、ネットワークはもっと活用できると思っています。内閣府の世界船と「東南アジア青年の船」という 2 つの事業が、より事業間交流することで、価値が高まると思っています。**異文化交流を通じて学び、社会貢献活動を実践することで、世界平和をもたらすことができる、そのために事後活動組織が存在する**と言えます。その意味で、事後活動組織同士が協力するということは、国際連携が生まれより大きなインパクトを与えることができ、かつその国の組織の価値も高まることとなります。私たちのパートナーシップは常にオープンであり、コロナウイルス、気候変動、自然災害など、共通に取り組むべき課題はたくさんあるのです。そして現在は、バーチャルなプラットフォームも活用できます。

■ ソーシャルワーカーとして目指す世界

私はソーシャルワーカーが自分にとってベストの仕事と考えています。人に関わり、個人の人生や社会にとってよい選択をしていくこと、世界がより平和になっていくこと、責任ある市民を増やしていくことが私の役割です。そして、個人的には日本

文化を伝えるということも私のミッションです。これらは世界船から始まったと思っており、自分が経験した全てのことを、人生を通して伝えていこうと思っています。視野が広がり、そしてネットワークができたからこそ、事業により「効果的」に活動ができています。私は、人生と人間の運命の価値体系が普遍的な秩序であることに気づきました。私たちがすべきことは、分かち合い、必要を満ち、欲を避け、心も行動も非暴力であることだと、実感するに至りました。よって、世界船を通じて日本政府が率先して取り組んでいるのは、社会をより良くするために主導的な役割を果たすことができる青年の人間的可能性を開発することです。私は、親善を作り出すための心の結束と、私たちの生活を照らしてくれる文化という光の輝きを再確認しました。

最後に、西行法師の詩を引用して締めくくります。

「真理を求める心

始まりは、小川のように浅く

最初は、しかし、その後

どんどん深みを増していく

より明瞭さを増しながら」

ラヴィ・チョプラ氏のプロフィール

「Gandhian Forum for Ethical Corporate Governance」（インドの公営企業におけるリーダーシップ開発）のアドバイザー、Radhakrishna Foundation（ニューデリー）事務局長を務める。数々の非営利団体を創設しており、「Discover Japan Club」「Konnichiwa Japan Society」全国規模の非営利団体「DISHA」創設者でもある。世界青年の船事後活動組織インド（SWYAA-India）会長。